

Germanistikにおける文化研究と 外国語教育への新たな視点

柏木 貴久子

1. はじめに

日本におけるGermanistik¹が、これからもその存続を主張していくための唯一の道は、社会に開かれた存在たることであろう。いかなる文学・言語・文化研究も、社会的現実に関わること無しには在りえないという意識を根底に据えることが大切であると思われる。同時にいかなる学術研究も政治的・経済的背景と全く無関係ではあり得ず、ある地域に対する文化的関心は、その地域への政治的・経済的関心と比例することも意識する必要がある。日本からドイツへの関心のベクトルが日本の近代化推進という国家プロジェクトに支えられていた明治時代をドイツ語需要の頂点と見るならば、その影響の延長線上で日本のGermanistikが専攻分野として優遇されてきたドイツ語好景気の時代は、英語以外の第二外国語履修を選択制にすることを是とする1991年の文部省(当時)大学設置基準緩和をひとつの象徴的分岐点として終息に向かうこととなった。1989/90年の東西ドイツ統一は確かにドイツとドイツ語への関心を高めたが、ブームは過ぎ去り、特にゲルマニストの教育・研究機関における活躍の場が縮小を始めたことで、Germanistikの将来についての悲観的見解はゲルマニストの共通認識にすらなった。それから十年余り経た今、

1 学部・学科の改変および名称変更が頻繁に行なわれる現代の日本の大学においては、かつて名称として機能していた「ドイツ文学科/独文科」が必ずしも専攻の組織名称として用いられない場合も増えている。また全国的に様々な学科名称も登場しているが、必ずしも専攻領域や研究方法を明示しているわけではない事情をふまえ、日本語名称の変化に伴う概念の流動性を避けるため本論ではドイツ語のGermanistikを使用する。またこれを専攻する者の呼称は、ドイツ語では名詞の男女単複という文法上の相違があるため、和文での読みやすさを考慮し、一律ゲルマニストと表記する。

私たちはそろそろこの悲観論に訣別する時期に来ているのではないだろうか。外的状況の変化を刷新の契機として前向きにとらえることが今後よりいっそう求められると思われる。その際、人文科学におけるパラダイムの変換をもたらしたKulturwissenschaftの隆盛を積極的に利用することは私たちにとって有効な手段であろう。本論では、Germanistikにおける最近の動向、研究方法の可能性を紹介しながら、その展望について述べてみたい。

2. Germanistikと文化研究

ドイツのGermanistikにおいて、とくに 80 年代以降「文化」(Kultur)の概念が学術理論形成における主要概念になったことは、昨今の日本のGermanistikにも大きな影響を与え、Kulturwissenschaftとしての方向付けは、「文化研究」「文化論」「文化学」²として定着しつつある。この方向付けは、日本のGermanistikがより社会に開かれた存在となるために、その研究対象、領域、テーマを社会的現実に関連付けながら開拓していくために、最も重要な役割を担っているといえよう。ジェンダー、ジェネレーション、メンタリティ、記憶、エスニシティ、社会史的民族学的視点からの地域、神話研究、慣習・儀礼研究などが比重を増し、さらに文字化されたもの、絵画、静止画像で捉えられるもののみならず、身振り、舞踊、身体パフォーマンスが考察対象として視野に入れられるようになってきた。ドイツにおいてはとりわけ、DFG（ドイツ学術振興会）会長でもあったゲルマニストのWolfgang Frühwaldが中心となり、1991年 „Geisteswissenschaften heute“³の表題のもと、伝統的文献学を文化研究へと改革することを提言したことが、方法論と学問領域の位置付けに関する議論を全国的に活発化するのに寄与したといえよう。議論は人文系

2 ドイツ語のKulturwissenschaftに対する日本語訳は統一されておらず、原語あるいはカタカナで表記されることも多い。本稿は基本的にKulturwissenschaftという上位概念のもとにさまざまな分野が展開し、Germanistikもそのひとつに属するという立場をとる。Kulturwissenschaftという方向性をとる領域を意味する表現として「文化研究」が適当であると思われるので、本稿ではこれを使用する。

3 Frühwald (1991).

の中心的存在であるドイツ語文献学内にとどまらなかった。いわゆる人文系研究領域を総称するGeisteswissenschaftという概念についても、従来のGeist（精神）でなくKultur（文化）を掲げるのが妥当という意見もある⁴。Geistという言葉に対しKulturがより包括的な意味をもつとして優位になったことが挙げられるが、これには学問領域におけるNaturとGeistの二極分化に疑問を呈するに至ったCharles Snowの「二つの文化」

-
- 4 Vgl. Benthien/Velten (2002) S.13. なお、Geisteswissenschaftを組織名称からはずす大学も増えているが、他方でこの呼称が消滅したということではない。19世紀初頭にはじまったこの概念は、言語・文学・芸術・哲学・歴史という人間の精神(Geist)の産物についての学問を指し、自然科学との区別を意図していた。当時の精神的背景には、人間精神の必然的進化を信ずる科学的実証主義(Positivismus)があった。理論的構築を目指し、近代性の旗標ともなっていたGeisteswissenschaftというこの言葉は、二度の大戦後、実証主義の衰退とともに以前の生彩を失うこととなった。さらに現代の日常言語においては非生産的な象牙の塔という負のイメージが定着していることも無視できない。文化分析の点からみると、GeisteswissenschaftはKulturの諸相をGeistが表象する形態、あるいはGeistが解釈する対象と捉える見方を強調するといえよう。自然科学・経済学・法学への需要が、(Geist、Kulturのどちらをその名に戴こうが)人文系諸科学へのそれを大きく上回る状況に危機感を抱き、後者の存在意義を問い直した論集があえてGeisteswissenschaftをタイトルに使用しているのは、Kulturwissenschaftの潮流がGeisteswissenschaftの発展の経緯上にあるものと明確化している点で興味深い。(Vgl. Keisinger, Hg. 2003)ただし大学組織上の学部学科名称については注意を喚起しておきたいが、方法論として文化研究を取り入れていても、そのすべてが組織として直接Kulturwissenschaftという名称を掲げるわけではないのである。Kulturwissenschaftは上位概念であって、それにはさまざまな専門分野が属することを考えるならば、複数のKulturwissenschaftenが存在しなければならないからだ。学部系列としてのKulturwissenschaften（複数）に含まれるのはまず非西洋文化を対象とする学問領域および文化人類学・民族学であることが多い。Germanistikから分岐したドイツ民俗学(Volkskunde、90年代からヨーロッパ民族学Europäische Ethnologieと名称変更が始まった)は、組織的に概ねこの中に含まれる。Germanistik、つまりドイツ語の文学・言語学・中世学およびドイツ語教育は、Romanistik、Anglistik、Amerikanistikなどと同様 Sprach- und LiteraturwissenschaftenあるいはGeisteswissenschaften、PhilologieやPhilosophieなどの名称を掲げた学部系列の中に入れられる。例えばミュンヘン大学では、ドイツ語の文学・言語学・中世学およびDeutschdidaktik(学校教育において、日本で言うところの「国語」「現代国語」科目を担当する教員を目指す学科)、司書学からなるDeutsche Philologie(ドイツ

という観点が影響を与えている。Kulturの概念は近年大きく拡大されることとなったが、その語源に目を向けると、ラテン語の動詞colo⁵は農耕に端を発し、耕す、手入れをする、定住する、さらには敬う、祈願するといった意味を持つ。それは自然・野性の対立概念として自然を加工し農作物を生産するという物質・技術面のみならず、収穫を祈る、崇拝するという精神面をも含む言葉である。Kulturは生活の営みそのものを問題にするのであり、広く物質面・人類学的所見をも内包できるのである。生活は社会の基盤の上に営まれるものであるから、そこでは社会との関

文献学)が北歐文献学、比較文学とともにひとつの組織を構成している。1991年の学部改変からはDaF(外国語としてのドイツ語)は比較言語学等とともに隣接組織として、これら両組織を含めた全体でひとつの学部を形成する。またドイツ民俗学/ヨーロッパ民族学はヨーロッパ以外を対象とする学科群とともにKulturwissenschaftenという学部属する。またベルリン自由大学ではKulturwissenschaftenを歴史学とともにひとつの学部系列として(Geschichts- und Kulturwissenschaften)、その下に神学、ユダヤ学およびアジア対象の学科を置き、Philosophie und Geisteswissenschaftenの下にドイツ文献学、英仏伊およびヨーロッパ古典文献学、哲学、音楽学、演劇学を置いている。一方単数形のKulturwissenschaftを学科名として戴く試みもある。教員の出身分野や研究領域から見てとれるように、主にGermanistik、あるいはVolkskunde/ Europäische Ethnologieを基盤とし、周辺領域との関連性、学際性を強調している。(Vgl. Böhme, Matussek, Müller 2000 S.212-216) 単数形Kulturwissenschaftを打ち出した初期の試みとしては、ベルリンのフンボルト大学が挙げられる。学科系列としてのKulturwissenschaften(複数)の下に、考古学、音楽・芸術史とならんで文化学科(Kulturwissenschaftliches Seminar)が設置されている。文化学科内ではさらに「美学・メディア」と「文化」の二領域に分かれているが、これについては批判もある。(Vgl. Vollhardt 2001, Benthien/Velten 2002 S.32, Anm.22.) 既存の学科内でもKulturという視点に重点が置かれ、また学際化が進んでいる現状を踏まえると、独立学科としてのアイデンティティおよび必然性については、その正当性を摸索している段階にあるといえよう。ただし、諸領域で進められる文化研究という方向性についての議論と専攻としての単数形Kulturwissenschaftを是とするかという議論は区別する必要があるだろう。前者の議論においては肯定的な見方が多い。(Vgl. Pornschlegel 1999) なおKulturwissenschaft(en)が有する4つの意味についてはNünning (2003) S. 5f.を参照。

5 colo (colere), 名詞cultus. ことばの語源からヨーロッパ精神史に沿った概念の変遷をまとめたものにBöhme (1996)がある。またアメリカ文学者のKlaus Hansenは現代におけるKulturの概念について、意味の多様性、社会的機能という視点から詳細かつ明確に論じている(Hansen 1995)。

連性がより明確に意識されることになる。

学際性の強調や専門を超えた文化研究へのシフトにはさまざまな要因がある。フランスのアナール学派が社会と文化の関連に重点を置き、歴史研究の関心を人間生活全般に広げたこと、権力の構造のなかで文化事象をとらえるMichel Foucaultの新しい歴史解釈が提起されたこと、書かれたこと話されたこと以外にも、肉体・身振りによるパフォーマンス的な「身体言語」に注意が払われるようになったこと、映像・電子技術の発達によって従来のカテゴリーにはまらないメディアが登場したこと、テキスト概念が拡大したこと、さらに「テキストとして文化」という見解が広がったことなどの要因が挙げられる。民族学者Clifford Geertzは、「人間は自分自身がはりめぐらした意味の網の中にかかっている動物」であるとし、文化はこの「意味の網目」⁶であるという記号論的な文化の定義を提唱した。象徴の意味を解釈し、意味構造の社会的基盤と意味内容をさぐるものが文化分析の作業であり、多層的な記号体系とその「厚い記述」を読みほぐしていこうという試みこそが「民族誌を行う」(ethnographisch arbeiten)⁷ことであるという。Geertzはまた、文化研究の本来の対象は「実生活のインフォーマルな論理」にあり、「見慣れない形態の現れるところで、日常的に起こるものにまなざしを向ける」ことが文化の分析に有効であるとする。インドネシアやモロッコといった、自らの文化圏から遠いと思われる、またそれとは相異なる様相を呈するとされる生活様式を研究の対象としたGeertzであるが、彼によれば、「ある民族の文化を理解することは、彼らの特殊性を希薄にしまうことなく、その通常性を明らかにすること」⁸になるという。つまり「見慣れないもの」に「見慣れたもの」を見出す作業が必要とされるわけだが、逆に「見慣れたもの」に対してはどうであろうか。

Foucaultは^{セクシュアリティ}性を抑圧する権力の装置を分析するにあたって、従来の歴史家が自明のこととしてきたもの、従来の歴史記述では注意を喚起しなくなってしまうことを再検討した。これにより客観性の神話に支えられた歴史を記述することそのものが、実は詩的行為であると示

6 Geertz (1987) S.9. Vgl. Bachmann-Medick (1996).

7 Geertz (1987) S.10.

8 Geertz (1987) S.21.

されるに至ったわけだが、Foucaultはそれまでの歴史学が「見慣れたもの」として記述してきたことに疑問を投げかけ、いまいちど「見慣れないもの」として検証すること、視座の転換を課題としたわけである。民族学および歴史学から提出された、事象に対するこれら二つの接近方法を考慮することが、文化分析には必要である。

さて、日本におけるGermanistikが対象にするのは、ドイツ語圏における文化事象、ならびにドイツ語を媒体として表出する文化事象であると定義できよう。ドイツ語圏ではまずドイツ語文献学の学部(Fakultät)としてLinguistik(言語)、Mediävistik(中世学)、Neuere deutsche Literaturwissenschaft(中世より後の文学研究)などの諸学科があり、Deutsch als Fremdsprache(外国語としてのドイツ語)はそこに含まれるか、あるいは大学によって別組織になっている場合もある。日本のGermanistikはAuslandsgermanistik(ドイツ語圏外におけるGermanistik)であるが、そこでは通常、規模の関係上これら諸学科が同一学科にまとめられるし、ドイツ語圏では別学部編成になっている分野、すなわち本国では19世紀末に組織としての独立を始め、Germanistikから枝分かれしたDeutsche Volkskunde /Europäische Ethnologie⁹も含まれる。さらにドイツ語およびドイツ語圏との関連からPhilosophie(哲学)、Theologie(神学)、Theaterwissenschaft(演劇学)、Kunstwissenschaft(芸術学つまり芸術史、芸術表現理論・解釈)、Musikwissenschaft(音楽学つまり音楽史、音楽理論・解釈)などをも部分的にその専門分野としての射程範囲に含むことになる。このような組織上の前提となっている学際性は、テーマ設定を柔軟にし、文化研究の促進に有利にはたらく。この点を私たちは戦略的に利用すべきである。

多彩な研究が可能な中、各専門分野が文化研究にどう参与できるのか。ここでは文学研究(Literaturwissenschaft)について述べてみたい。

9 Volkskundeのドイツ語圏における新名称はEuropäische Ethnologie。90年代後半から徐々に改名が進み、現在ではほぼ全国的に浸透している。新・旧名称を並べて表記する大学もある。

2. 文化研究としての文学研究

テキストを読み解くことで、さまざまな文化テーマ (Kulturthema) に接近することが可能である。例えば権力、死、セクシュアリティ、攻撃性、暴力、自然との関係などが挙げられるが、それぞれのテーマには文化人類学、民族学、社会学、歴史学・美術史、文献学など複数の専門領域が携わることが可能かつ必要であり、学際的な連繋と研究成果の相互補完がその基盤となる。第一次分析対象の相違から、方法論的には、フィールドワーク、物的検証、文献調査といったように各分野によって異なるが、それぞれの立場からそれぞれの考察対象を経て、それぞれの切り口でテーマに接近していくことが重要である。

次に文化テーマの例として「食」をとりあげながら、文学研究の方法を紹介する。

2. 1. 食という文化テーマー文学研究からのアプローチ

美食家で名高いBrillat-Savarinのことばに次のようなものがある。

「君が何を食しているか言ってみたまえ、君が何ものであるか言って差し上げよう。」¹⁰

食は集団的振舞い、心情、メンタリティが発現する場であり、その歴史は日常生活の歴史 (生活史) の一部を成すことから、食を取り上げることは生の基盤を対象にすることだといえよう。生きるのに不可欠な食物摂取という身体的・心理的・社会文化的側面を持った行為を「文化テーマ」(Kulturthema) として考察することについて、まずは次の点を確認しておきたい。食に関する事象は農学・応用生物学・栄養学・化学をはじめとした自然科学的見地、あるいは産業経済学的見地から捉えることができる。だが、文化テーマとして考察する上では、むしろ、それらでは捉えきれない人間の行為・行動規範・心的態度 (メンタリティ) を、それらとの関連をも視野に収めながら、文化史的観点を踏まえた上で、分析解釈しようとするのが課題となる。

10 Brillat-Savarin (1962) S.21.

文化研究としての文学研究は文学作品を一次文献とする。文学テキストにあらわれた飲食というテーマを探るとき、具体的な研究対象は、美的に構築された世界における飲食事象である。文学テキストにおける食の記述は、経験主義的文化研究 (empirische Kulturwissenschaft、つまり Volkskunde /Europäische Ethnologie) の観点に照らして、客観化・対象化する必要があり、食事や特定の食物を機能に照らして体系的に観察しなければならない。さて、食べることへの人間の欲求には二つの要素がある。ひとつは喉の渇き、空腹という「生理的欲求」(Bedürfnisse)、もうひとつはそれを超えた「高次の欲求」(Begehren)、すなわち意味や象徴への憧憬、コミュニケーション (個人によるコミュニケーションだけでなく共同体的、さらには神との交流としてのKommunionもこれに含まれよう) を希求することである。そしてこのBegehrenが食物を摂取するという行為を演出する。生命体としてBedürfnisseからは逃れることのできない、自然の再生産により成り立っている人間の身体も、意味生成・象徴作用・意志伝達を担って演出に組み込まれる。文学テキストにおける食に関する記述は、審美的に演出された、作られた世界での事象であり、演出され、人工的に場面に組み込まれたものである。それは「趣味(嗜好)の劇場」(Geschmack-Theater)¹¹ といえるものであり、そこでGeschmackを演出することによって意味付与が起こる。演出がその際に利用するのが「儀礼」(Ritual)である。

ではその「儀礼」(Ritual)とは何か。簡潔に定義すれば、儀礼は文化に形付けられた行為であり、社会化の過程に働きかけ、コミュニケーションを形成・確認・強化する。19世紀末からの初期儀礼研究においては、宗教・呪術との関連が対象であった。しかし1970年代以降、主に人類学者Edmund LeachやErving Goffmanらの貢献により、儀礼を広くコミュニケーション・社会的行動としてとらえる見方が広まった。今日では、儀礼という概念はすべての形式的行動に拡大され、象徴的で制度化された形式的行動すべてを、包括的に儀礼的行動と捉えることが多い。概念の拡大の幅には程度差があるが、重要なのは、儀礼的行為のなかで宗教的行為と世俗的行為の違い、聖と俗という対立要素に注目することだと

11 Neumann (1996) S.36.

されている。ここで面白い点は、Gerhard Neumannが指摘しているように、世俗的傾向がすすむ近代社会の中にあっても、儀礼の聖なる部分が立ち現れる瞬間、「聖なる瞬間」(sakrales Moment)が存在するということが、つまり合理的に説明ができない、グレイゾーンとしか言えない領域があるということであろう。社会生活が世俗化するなかで、なおも依然として儀礼的行為には神聖性が幻影のように現れる瞬間がある¹²。

文学テキストにおける飲食事象は、「文化的記憶」(kulturelles Gedächtnis)¹³、先行する儀礼に内在する歴史的コードならびに象徴性と絡み合う。そもそも演出は審美化の過程でもあるわけだが、食の記述は、宗教・神話との類似性を審美的に扱うことで儀礼を取り込むことができる。例えば最後の晩餐、キリストの象徴である魚、子羊、ワインなど宗教・神話につながる食への言及には、芸術作品における審美的なものと神話的宗教的な儀礼との結びつきが見てとれる。換言すれば芸術作品は先行する儀礼に審美的につながっていると言える。儀礼の実践はしかし、すでにあるものの単なる反復や全くの繰り返しはではあり得ない。それは、原型(先行型)に依存する一方で、変容の可能性を常に秘めている。先行する伝統的形式に依拠する硬直性と、創造と変化を可能にする流動性という二つの極を持つ。Heinz Schlafferは、美的創造物としての芸術作品にこの二面性を見ており、彼によれば「審美化とは、芸術作品が先行する宗教的、神話的な型への依存を持続させながら、同時にそれらから独立していく過程」である。それゆえ審美的なものは、顧みられなければ消え行く運命にある先行型を、その失われたあるいは失われつつある機能を「フィクションとして復権させる」¹⁴ ことができるという。演出による作られた作品世界が儀礼、すなわち先行型要素と日常的な事柄・行為を結びつけ、同時にそれらを構造化し、配列し、意味を与える。儀礼は、Stephen Greenblattの用語でいうところの「社会的エネルギー」¹⁵の結節点として機能する。Greenblattは社会的エネルギーを、ギリシャ修辞学に起源をもつエネルゲイア(精神を動かす、という意味をもつ)という語から採用し、これに社会的歴史的な機能性を見ている。文学作

12 Neumann (2000) S.46 f.

13 Maurice Halbwachsの概念を採用したJan Assmannの用語。Assmann (2000)。

14 Schlaffer (1990) S.93.

品の美的形式の中にコード化された社会的エネルギーを、時代を超えて生の幻想を生みつけ、再生産と循環を繰り返すという。儀礼は、たとえば衣装とかエンブレム、舞踊といった他の文化財と同じくテキスト痕跡として作品に残り、エネルギー循環の交渉に加担する。儀礼を内包する食事場面は「社会的エネルギーの循環」の転回点であり、その中から社会的儀礼のモデルが表出してくるといえる。たとえば金曜日の魚料理は、キリスト受難の日である聖金曜日にちなんだ哀悼の日をあらわし、週ごとの精進料理という役割を担うというように。このような媒介方法を通じて、飲食儀礼は物語の構造化に寄与するのであり、物語の「装置」^{ディスポジティブ}として、物語の枠における変速・駆動装置として機能する。

2. 2. 研究例 — Thomas Mann

食に関する記述は、すべての作家が詳細に提供しているわけではない。Roland Barthesによれば、

「食事風景がどの程度描かれているかによって小説を分類することができよう。食物の詳細は意味作用を超えて、意味の（イデオロギー）の謎に包まれた補足物を提供するのである。」¹⁶

「謎に包まれた補足物」を十二分に提供している作家としてThomas Mannが挙げられよう。彼においては作家の役割についての自己省察も、繰り返し食との関連の中で語られているほどである¹⁷。例えば出世作『ブッデンブローク家の人々』（„Buddenbrooks“）出版のあとに「豪華な食事の叙述家」と評されたことに対し、Mannは、作品にはワーグナー的なライトモチーフの手法が含まれていること、つまり単なる食事の描写ではないことを言明している。また、ミュンヘンの文学界から受けたLübecker Marzipanbäcker（リューベックのマジパン屋）¹⁸との揶揄に対しても、Marzipanとは美味なばかりでなくコスモポリタンの、神秘的、非通俗的であり、Marzipanbäckerと呼ばれるのにやぶさかでない¹⁹と毅然

15 Greenblatt (1993) S.16.

16 Barthes (1974) S.169 f.

17 以下の例はKashiwagi (2003) S.11-13 からの抜粋。

と反論している。さらに『作家活動の生理学』(„Zur Physiologie des dichterischen Schaffens“)というエッセイには「わたしの生理的弱点は胃腸であり、ここからすべてが始まっている」とあり、消化器官への強い関心が示されている。Mann作品の飲食事象は三つの次元すなわち身体器官(körperliche Organe)、食物(Nahrungsmittel)、食物儀礼(Nahrungsrituale)から分析することが出来るが¹⁸、例えば消化器官はショーペンハウアー哲学、魚と子羊はキリスト教とユダヤ教の伝統から、ヘルメスの肉体は神話、供物と最後の晩餐はキリスト教、バッカスの宴はギリシャ神話というように、これらはいずれも文化的儀礼的伝統に媒介されている。『ブッデンブローク家の人々』では、リューベックの豪商ブッデンブローク家の没落過程が、新居落成の会食、クリスマス、木曜日ごとの親類の集まり、晩餐会、遠足、日々の朝食、お茶の時間、酒やタバコといった嗜好品を通じて表出される。摂取されるものの質と量、食物や嗜好品の身体への摂取の様子が物語の重要部分を成し、家族構成員の食物摂取の状況と消化器官の状態で、彼らの社会に対する関係が明らかにされる。歯、食道、胃腸といった身体器官はショーペンハウアー哲学に呼応し、客観化された飢餓、生への意志を表す。食物では例えば天然の蜂蜜は経済を度外視した愛情をあらわし、過剰な甘さは婚姻による策略、死、甘い酩酊はディオニュソス的なものへの傾倒とつながり、食生活における保守主義は文化順応の困難さを露呈させるという具合である。塩とパンを贈ることで始まる新居落成の会食、クリスマスの祝祭食は、儀礼に彩られた食事場面である。神々の彫像を施し「食の神殿」と形容される広間での飲食では、食卓にのぼるものが宗教的神話的背景を持つと同時にエコノミー(産出と配分と運用の構造)と結びつく。一家の経済的状況と社会的立場が知らされ、家族史は食卓に乗せられる。²⁰

2. 3. 文学研究と文化の詩学

文学研究はある野望をもっている。それは、「文化の詩学」(Stephen Greenblatt)を行うこと、さまざまな生活・行動様式が多層的に編みこ

18 リューベックはMannの出身地であり、マジパンの老舗であるNiederegger社がある。

19 Kashiwagi (2003) S.17 f.

まれたテキストという織物を読み解こうとする作業を通じて、意味の生産過程の謎に迫ることである。文学テキストに散りばめられた他のさまざまなテキストに注意を払い、作品構造を可能にする社会的、文化的コンテキストを掘り起こしながら、作品が包摂する意味の産出を理解しようとするのである。作品のなかに残された種々の「痕跡」をもとに文化的「交渉」²¹を探ることは、過去を暴くことでは決して終わらない。文学作品は、ほかの芸術と同様に、文化を伝播する媒介者の役割を演じる。文学テキストはあらゆる表現形態、画像、音声、動きを媒体として利用し、生活空間、社会状況を呈示する文化の複合体である。その際、分析対象となる文献を、通俗的・周辺的なものや雑誌、広告、ちらしなど従来軽視されがちであったものに拡大するのは重要かつ必要なことであるが、同時に著名な作品、古典的作品と言われるものを軽視するのは適当なことではない。文学作品は、とりわけそれが優れた知的試みによるものであれば、時代を超えて「消費」²²され続け、「消費」されることにより影響力を行使し続けるからである。作品はそれぞれの時代の空気に影響された受容を可能にすると同時に、他方ではそこに切り取られた文化を、ある種の継続性を主張しながら再生産し、その周囲に自らにまつわる記憶を堆積させてゆく。分析対象の歴史性と批評行為の歴史性は接触し、さらに解釈の解釈により情報は蓄積される。文学作品の内部に、そしてまた作品とその消費者とのコミュニケーションにおいて間文化性（Interkulturalität）が存在するのである。文学作品はそれ自身のなかに文化的記憶を有している。つまりHillis Millerが「言語的瞬間」と呼んだ、読む行為それぞれの瞬間は、作品のもつ文化的空間と、読むという行為を行う者のそれとが出会う瞬間にほかならない。これは復元と生成と変容を含む、ダイナミックな文化消費の瞬間である。

文学研究に従事する者は自分自身が「文化の消費者」であるわけだが、その研究は文化理解に貢献できるのである。

20 詳しい分析はKashiwagi (2003) 第II章。Vgl. auch Kashiwagi (1997).

21 Stephen Greenblattの用語による。Greenblatt (1993).

22 Michel de Certeauの用語による。de Certeau (1980).

3. 文化研究とドイツ語教育

文化研究は、Deutsch als Fremdsprache（外国語としてのドイツ語/DaF）においても重要である。なぜなら外国語を学ぶということは、ことばと結びついた「意味」とその背景に触れ合うことにほかならず、それ自体が文化的行為だからである。外国語教育の現場は文化分析と文化実践が共存する特別な場であるといえよう。

外国語学習、とりわけlingua francaである英語以外の外国語の学習においては、どのように文化的コンテクストを学ぶのか、どのように認識能力を身に付けるのかが大きな課題となる。これについて重要な鍵を握るのはいわゆる „Landeskunde“（Kulturkunde、Landesstudien、Realienkundeとも呼ばれる）²³ の分野である。„Landeskunde“についてはドイツ語圏においてすら、教育研究機関における講座設置の欠如が批判されており、その位置付けは確立されていない。そもそも „Landeskunde“ という概念自体が流動的であり、それに盛り込むべき具体的内容の選定も困難である。ドイツ国内の議論でもその定義には抽象性がつきまとい、²⁴ 結局は「単なる（情報の）寄せ集め」²⁵ からの脱却が図られていないという批判もある。

23 Landeskundeは字義通りには「その国の情報に通じること」を意味するが、この名称そのものに今や疑問がもたれている。グローバル化が進むなか、ネーションとエスニシティの対応関係が複雑化していること、情報が細分化し、地域情報の伝達に従来のLandという単語が対応しきれない現状があるためである。代わってLandesstudien（英語のstudiesに対応するため複数形）、Kulturkunde、Realienkundeという名称も使われているが、統一されていないので、ここでは便宜上旧来の名称を使い、括弧付きの„Landeskunde“と呼ぶ。

24 例えばAlois Wierlacherは„Landeskunde“とは地理、歴史、法、それに日常生活、メンタリティという複数分野によるLandesstudienであるべきだと定義している。「地理、歴史、法」がまず挙げられていることから、この定義の前提には70年代以降強調された、社会科学と歴史の重視が影響を与えているといえる。またDaF入門書であるEinführung in das Studium des Faches Deutsch als Fremdsprache (1989)におけるHartmut DelmasとKlaus Vorderwülbeckeの定義によれば、„Landeskunde“とは「丹念に選ばれた関連分野からの情報への学問的アプローチであり、その体系化された分類から、ドイツの現実のいまを写し取る相互連関に満ちた体系が読み取れるようなもの」であるという。Vgl. Altmayer (2005) S.17, 19.

ドイツ語圏における„Landeskunde“の議論においては、中級以上の授業に読解・討議のテーマとして盛り込まれていく場面が主に想定されている。またドイツ語圏内のドイツ語学習では、移民のための文化的順応を見据えたテーマ設定が多いのも特徴的である。例えば文化研究としての„Landeskunde“を提言するClaus Altmayerは、„Landeskunde“が取り組むべきテーマの具体例としてドイツにおける外国人問題を挙げる。彼はとりわけトルコからの移住労働者、またその二世代、三世代、さらにはドイツ国籍を取得しているが、外見の異質さゆえに「ドイツ人」のカテゴリーに所属すると見なされない人々に着目する。実際ドイツにおけるDaFは国内でのドイツ語教育を大きな柱とするので、学習者のドイツ社会への適応と統合の現状と向き合うことは、„Landeskunde“の最重要課題といえよう。しかし日本のドイツ語学習者は状況（生活状況、学習条件、母語言語）も目的も異なっている。日本には日本のための„Landeskunde“に関する具体的カリキュラムの構築が必要である。その際、次の三点が考慮の対象となろう。

1. 何をどのように文化的情報として教授するのか。アルマナック（国別年鑑）的客観的情報の伝達か、想像的解釈をより必要とするトピックの提供か。その割合をいかにするか：

教える側が避けるべきことは、ステレオタイプのドイツ（オーストリア、スイス）像を植え付けることであり、逆に留意すべきことは、些細なことから自発的問題意識と認識能力を呼び起こすことである。

2. どの履修レベルで、どのような情報を導入するか。日本語での情報提供をどの程度行うか、あるいは行ってよいのか：

とりわけ日本の大学では、ドイツ語での教材読解（簡単なエッセイ、新聞、雑誌、文学作品）や（簡単な）討議が可能な中上級よりも、学部1、2年で教養科目としてドイツ語を学ぶ初中級のグループが圧倒的に多い。このような状況で、ドイツ語と日本語の情報をどの

ように配分するかは、特にむずかしい問題である。

3. 一般日常的な状況が設定されている初級学習者のテキストを、いかに効果的に文化学習の契機にするか：

初級テキストの場面設定を「民族誌」と捉え、先に述べた「見慣れないものを見慣れたものにする」、「見慣れたものを見慣れないものにする」という二つの視点を効果的に喚起することが重要である。また「日常的実践」(Michel de Certeau)は、異質で流動的要素を前に、瞬時の決断が下されなければならない戦術的な行為であるという。外国語授業で展開されるのはまさにそのような場面である。外国語にふれるという特別な場所で、学習者に日常的実践そのものを意識化させることが必要である。

Germanistikが新たに得た文化研究の方法論ならびにその分析をドイツ語教育に応用し、これに関する理論的枠組みを日本の大学教育の実情に照らして構築することが今後の課題となる。

文献目録

- Altmayer, Claus (2004): Kultur als Hypertext. Zu Theorie und Praxis der Kulturwissenschaft im Fach Deutsch als Fremdsprache. München: Iudicium
- Assmann, Jan (2000): Religion und kulturelles Gedächtnis. München: Beck
- Bachmann-Medick, Doris (Hg.) (1996): Kultur als Text. Die anthropologische Wende in der Literaturwissenschaft. Hg. von Doris Bachmann-Medick. Frankfurt a.M.: Fischer
- Barthes, Roland (1974): Sade, Fourier, Loyola. Frankfurt a.M.: Suhrkamp
- Benthien, Claudia und Hans Rudolf Velten (2002): Einleitung. In: Germanistik als Kulturwissenschaft. Hg. von Claudia Benthien und Hans Rudolf Velten. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, S.7-34
- Böhme, Hartmut, Peter Matussek und Lothar Müller (2000): Orientierung Kulturwissenschaft. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt
- Böhme, Hartmut (1996): Vom Cultus zur Kultur(wissenschaft). Zur historischen Semantik des Kulturbegriffs. In: Literaturwissenschaft-Kulturwissenschaft. Hg. von

- Renate Glaser und Matthias Luserke. Opladen: Westdeutscher Verlag, S.48-68
- Brillat-Savarin, Jean Anthelme (1962): Physiologie des Geschmacks oder Betrachtungen über das höhere Tafelvergnügen. München: Heyne
- de Certeau, Michel (1980): Art de faire. Paris : Union Générale
- Frühwald, Wolfgang, Hans Robert Jauß, Reinhart Koselleck, Jürgen Mittelstraß und Burkhard Steinwachs. (1991): Geisteswissenschaften heute. Eine Denkschrift. Frankfurt a.M.
- Geertz, Clifford (1987): Dichte Beschreibung. Bemerkungen zu einer deutenden Theorie der Kultur. In: Clifford Geertz: Dichte Beschreibung. Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Greenblatt, Stephen (1993): Verhandlungen mit Shakespeare. Innenansichten der englischen Renaissance. Frankfurt a.M.: Fischer.
- Kashiwagi, Kikuko (1997): Familiengeschichten aufgetischt — Speisegewohnheiten bei den Nires (Kita Morio) und Buddenbrooks (Thomas Mann) In: Veröffentlichungen des Japanisch-Deutschen Zentrums Berlin. Reihe 1 Band 35, S.109-114
- Kashiwagi, Kikuko (2003): Festmahl und frugales Mahl. Nahrungsrituale als Dispositive des Erzählens im Werk Thomas Manns. Freiburg: Rombach
- Keisinger, Florian und Steffen Seischab (Hg.) (2003): Wozu Geisteswissenschaften? Kontroverse Argumente für eine überfällige Debatte. Frankfurt a.M., New York: Campus
- Neumann, Gerhard (1996): Geschmack-Theater. Mahlzeit und soziale Inszenierung. In: Geschmacksache. Hg. von Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland GmbH. Göttingen: Steidl, S.35-64
- Neumann, Gerhard (2000): Begriff und Funktion des Rituals im Feld der Literaturwissenschaft. In: Lesbarkeit der Kultur. Literaturwissenschaft zwischen Kulturtechnik und Ethnographie. Hg. von Gerhard Neumann und Sigrid Weigel. München: Fink, S.19-52
- Nünning, Vera und Ansgar Nünning (2003): Kulturwissenschaften. Eine multiperspektivische Einführung in einen interdisziplinären Diskussionszusammenhang. In: Konzepte der Kulturwissenschaften. Hg. von Ansgar Nünning und Vera Nünning. Stuttgart, Weimar: Metzler, S.1-18
- Hansen, Klaus P. (1995): Kultur und Kulturwissenschaft. Eine Einführung. Tübingen, Basel: Francke.
- Pornschlegel, Clemens (1999): Das Paradigma, das keines ist. Anmerkungen zu einer unglücklichen Debatte. In: Mitteilungen des Deutschen Germanistenverbandes 46.4.

S. 520-532

Schlaffer, Heinz (1990): Poesie und Wissen. Die Entstehung des ästhetischen Bewußtseins und der philologischen Erkenntnis. Frankfurt a.M.: Suhrkamp

Vollhardt, Friedrich (2001): Kittlers Leere. Kulturwissenschaft als Entertainment. In: Merkur. 55.8, S.711-716

Kulturwissenschaftliche Ausrichtung der Germanistik in Japan und Perspektive für den Deutschunterricht

Kikuko Kashiwagi

Germanistik in Japan muss für die Gesellschaft offen sein, um in der Gegenwart und Zukunft eine eigenständige Existenz zu bewahren. Von der deprimierten Stimmung, die seit einem guten Jahrzehnt wegen der Folgen der Universitätsreform die Germanistik in Japan beherrscht, sollte man sich so schnell wie möglich lösen. Die Germanisten können sich die Konjunktur der Kulturwissenschaft, die einen Paradigmawechsel in den Geisteswissenschaften herbeiführte, zunutze machen.

Die kulturwissenschaftlichen Ansätze erweitern den Forschungsgegenstand der Germanistik um Themen wie Gender, Generation, Mentalität, Gedächtnis, Ethnizität, Lokalität sowie Mythos- und Ritualforschung und sind häufig aus einer anthropologischen Betrachtungsweise gespeist. Als Leitbegriff fungiert ein erweiterter Begriff der „Kultur“. Eine semiotische Definition der Kultur als Bedeutungsgewebe und ein Verständnis von Kultur als Kontext, insbesondere in Clifford Geertz Terminus der dichten Beschreibung spielen eine bedeutende Rolle. Geertz pointiert dabei den „Blick auf das Gewöhnliche an Orten, wo es in ungewohnten Formen auftritt.“ Gleichzeitig aber auch muss, wie Foucault durch seine Analysen der Dispositive der Macht gezeigt hat, der Blick auf das

Ungewöhnliche an Orten, wo es in gewohnten Formen auftritt, gerichtet werden. Kulturelle Praktiken können auf diese Weise analysiert und hinterfragt werden.

Die japanischen Germanisten wenden sich seit einigen Jahren verstärkt kulturwissenschaftlichen Theorien und Beschreibungen zu. Sie behandeln kulturelle Produkte und Formationen aus und im deutschsprachigen Raum, sowie deren Ausdruck in und mittels der deutschen Sprache. Die Situation der japanischen Germanistik als Auslandsgermanistik, d.h. dass sie wegen ihres begrenzten institutionellen Umfangs in den deutschsprachigen Ländern häufig getrennt existierende Disziplinen wie Volkskunde oder Theater-, Kunst-, Musikwissenschaft, auch z.T. Philosophie und Theologie mit umfasst, kann sich für interdisziplinäre kulturwissenschaftliche Ansätze positiv auswirken und in der universitären Selbstbehauptung strategisch genutzt werden.

Literaturwissenschaft als Kulturwissenschaft kann, indem sie literarische Texte als Primärliteratur wählt und fachspezifisch tradierte hermeneutische Methode anwendet, zu verschiedenen Kulturthemen beitragen. Zum Beispiel zum Kulturthema Essen: Darstellungen rund um die Nahrung inklusive deren Aufnahme sind in Hinsicht auf die empirische Kulturwissenschaft zu objektivieren, und Mahlzeiten sowie Nahrungsmittel sind nach Funktionen und ihren symbolischen und distinktiven Überformungen systematisch zu betrachten. Essensdarstellungen im literarischen Text sind Ereignisse in einer ästhetisch gestalteten Welt. Sie rekurrieren auf die Inszenierungen der kulturellen und ritualisierten Lebenswirklichkeit und werden im literarischen Werk potenziert artifiziell in Szene gesetzt, wo sie als Schaltstelle und Generator des Geschehens fungieren. Dies geschieht in einem „Geschmack-Theater“ (G. Neumann), in dem die Inszenierung sich zur Sinnstiftung Rituale, also im weitesten Sinne kulturell geformte Handlungen zunutze macht. Durch ästhetische Relation zu ihren Vorformen schaffen Nahrungsrituale Bedeutungen im Textgeschehen

und konstruieren das Textgefüge, in dem wegen des erwähnten Rekurses „soziale Energie“ (S. Greenblatt) zirkuliert. Auf diese Weise werden Nahrungsrituale zu höchst interessanten Dispositiven des Erzählens.

Literaturwissenschaft als Kulturwissenschaft hat die Ambition, die „Poetik der Kultur“ (wie es der New Historicism formuliert) zu verstehen. Sie versucht, über die textimmanente Interpretation hinaus durch Analyse des literarischen Textes das Rätsel des kulturellen Bedeutungsprozesses zu entziffern. In den Text sind die verschiedensten Lebens- und Handlungsmuster durch Bilder, Gebärden, Tanz, Performanz usw. eingewoben und mit Bedeutung versehen. Literatur ist ein Kulturkomplex. Interkulturalität findet sich im einzelnen Werk ebenso wie in der Kommunikation zwischen diesem und seinem Rezipienten. Literaturwerke tragen in sich ein kulturelles Gedächtnis. Im Prozess der Konsumtion reproduziert und modifiziert der Rezipient den Gehalt des kulturellen Gedächtnisses.

Die kulturwissenschaftliche Ausrichtung der Germanistik ist auch für Deutsch als Fremdsprache relevant, da das Fremdsprachelernen ein kulturelles Handeln und der Fremdsprachenunterricht ein Ort von kultureller Erfahrung und Kulturinterpretation ist. Für Vermittlung und Verständnis des kulturellen Kontextes ist vor allem die „Landeskunde“ (auch Kulturkunde, Landesstudien, Realienkunde benannt) zuständig. Vor dem Hintergrund des erweiterten Kulturbegriffs ist deren Aufgabe und Ansatz jedoch neu zu bestimmen. Wichtige Gesichtspunkte einer Neubestimmung der „Landeskunde“ im universitären Unterricht Deutsch als zweite Fremdsprache in Japan sind:

- 1) In welcher Proportion bietet man einerseits objektive, almanachartige Informationen und andererseits Stoffe an, die kulturelle Praktiken und Deutungen vermitteln.
- 2) Zu welchem Zeitpunkt, in welcher Sprachstufe bietet man in dem sehr begrenzten Zeitraum welche Themen an, und kann oder darf dabei Japanisch benutzt werden.
- 3) Wie effektiv können Alltagsszenen in Lehrbüchern für Anfänger zum Anlass für die Entwicklung von Kulturverständnis genutzt werden? Wichtig ist es, bei

柏木 貴久子

den Lernenden Aufmerksamkeit auf den erwähnten doppelten Blick auf das Gewöhnliche und das Ungewöhnliche in der Alltagspraxis zu wecken.